

言葉のない世界へ

詩をめぐるワークショップ(中級篇)

山崎佳代子(ベオグランド大学)kayokoyamasaki@hotmail.com

はじめに

外国語を学ぶ教室活動では、到達するべき目標が定められ、それに応じて教授法や手段が選ばれて、活動が終われば、個々の学習者が目標をどれほど達成したかを教師が調べて評価する、とういう基本的な流れが一般的だろう。活動は、個人や小グループが能力を競い合うことによって刺激される場合が多い。しかし、私たちが母語を習得してきた過程を振り返れば、必ずしも、こうした流れのなかで語彙や文型パターンを習得してきたわけではない。母語に限らず、外国語を生活のなかで習得していく過程では、私たちをとりまく人間関係や社会の枠組みから生まれるずっと複雑な精神活動、身体活動、感情をふくめた体験が、言語習得に密接なかかわりを持つことが思い出される。

2003年夏、日本からベオグランドへやってきた学生A君がこんな話をしてくれた。「冷たい山の川の水でした。女の子と僕は、川に入って水をかけあって遊んだ。Voda, voda。水というセルビア語。この言葉を僕は、一生、忘れないと思う」と。難民支援のプログラムで、子供たちを集めて登山を体験するという合宿に、彼は参加したが、片言の英語もままならない子供たちとの生活で、彼が覚えたいくつかの言葉の背後には、子供たちと共にした大切な体験があったのだ。もちろん彼が目的としたのはセルビア語の習得ではない。が、子供たちとの共同体で、言語の習得を始めたのだ。

この体験談は、外国語教育には直接関係ない。が、パターン化された教室活動ではどうしても欠落していく大切なものを暗示している。まず言語活動では、身体性が重要な要素を持っているということ。つぎに善き人間関係は、言語習得のプロセスを活性化する、ということ。すなわち教室活動でよくみられる心理的な負担、間違ったら恥ずかしいとか、ほかの人よりも言語習得能力が劣っているのは辛いといった羞恥心や恐怖感から人を解き放ち、心を安らかにし、自然で自発的、直感的な豊かさのある言語活動を促す、ということ。それはまた異文化交流を可能にする。こうして習得した言葉は、強い印象に残る精神的な体験となって、長いこと記憶に残る。人格や思想を形成する節目となるような経験と結びついているからだ。

ここでは中級のための「詩をめぐるワークショップ」(中級)のモデルを提示し、参加者のアンケートを中心に、オータナティヴな教室活動の実践報告をしたい。

詩をめぐるワークショップ『言葉のない世界へ』とそのモデル

以下は、田村隆一「帰途」とヴォイスラヴ・カラノヴィッチ「詩を書くということ」の二編を取り上げた中級対象の「詩をめぐるワークショップ」の流れである。二つの詩は、いずれも目に見える世界の背後に広がる、目に見えぬ形而上の世界を示唆している。いずれにも果物がモティーフとして登場し、映像にも接点がある。所要時間は90分。進行役の言葉を記したが、これを参考にイメージをとらえ、自分の言葉で自然に発話すればよい。ただし基本的な活動の枠はくずさないようにする。

準備

- ・林檎をひとつ用意し、できるだけ沢山の新聞紙で包み、大きな紙袋、または箱に入れる。

- ・セルビア語の詩と日本語の詩を一篇づつ用意。どちらにも翻訳を付す。A4版に印字、参加者数用意する。そのほか台紙に使う白紙(A4)、セロテープまたは糊。
- ・それぞれの詩を、一行ずつ分けて切り離して、カードの状態にしておく。翻訳を付す。いずれの詩句も、ローマ字で読み方を併記しておく。片方の言語がわからなくても、音読ができるためだ。
- ・音楽。ここではキース・ジャレットのラ・スカラを選んだ。音源はCD。

導入部

1 椅子を並べて、ひとつの大きな輪をつくる。参加者はひとりずつ、それぞれ名前を発音。(自己紹介)
進行役は、「さあ、少し変わった旅に出ましょう。今、どんな言葉を思い浮かべますか。声には出さないでください。(しばらく間をおく)その言葉をそっとあなたの椅子の下にしまっておきましょう。それから少しだけ取り出して、隣の人にも分けましょう。(しばらく間をおく)その言葉を空気に描いてみましょうか。ここから魔法の鉛筆をまわします。目の前の空気に、あなたの気持ちを絵に描いて、横の人に渡してください」と言い、鉛筆を隣の人にわたす仕草をする。身体の動きだけを使う。

最後の参加者が描き終わると、進行役は、空気から糸を巻きとるように空間を歩行、巻き取った「気持ちの言葉」を、そっとしまっておきましょう、と言って、進行役の椅子の下に隠す仕草をする。

2 進行役は、「これから出かけるところは、ちょっと変わった世界です。その世界は、実は目には見えない。そこに秘密が隠されています。セルビアの抒情詩人ステヴァン・ライチコヴィッチさんは、詩には秘密がなくてはならない、と言いました。私たちの人生もたくさん秘密が隠されているからです。旅の前に、この袋を回しますね。中に何が入っているか、当ててみてください。袋を自由に触ってください。ただ中身を空けてはいけません。匂いを嗅いでも、振ってみてもかまいませんけど。」と次の活動を指示する。参加者は順番に、自由に発言。最後の参加者が発言したあと、進行役は「さあ、何でしょう。旅のあとで開きましょう」と言って、部屋の隅に袋(または箱)を置く。

大きな輪のなかの活動

- 1 進行役は、詩句を記したカードを参加者に一枚ずつ配る。(参加者の数が多いときは、二組用意して、ペアを作りペアで行動をともにする。)
- 2 進行役は、「みなさんにカードお渡ししましたね」と言い、しばらく反応を見る。全員が黙読が終わったのを確認して、「ひとつひとつを声に出して読んでみましょう」と指示。参加者各自、日本語、セルビア語で詩句を読む。どちらかの言語を読んでもいいし、両方読んでもいい。
- 3 音楽を静かに流す。進行役は「立ってください。それでは旅に出ましょうか。旅の途中で誰かに出会ったら、挨拶をかわすようにカードに書かれた言葉を互いに読みあいましょう」と指示。椅子は片付け、参加者は広い空間を自由に歩き回り、出会った人とカードを互いに読みあう。進行役は、全体の動きと活動をよく観察する。時間が短いと、感動は薄れて充分に詩句の世界へ入り込めない。長すぎると私語でグループの集中力が落ちる。進行役は、輪の中に入って活動の様子を把握すること。
- 4 そろそろ読みあわせができたと判断したら、音楽を次第に低くする。進行役は、「その世界は、もうそこです。実は、みんなが手にして読んでいたのは、大きな地図の一部でした。そこに入る前に、一つの大きな地図を作りましょう。地図、それは詩なのです。自分の番だな、と思った人は、自分のカードの言葉を読んでください。次が自分のカードだ、と思った人は、それに続けます。こうしてみんなの言葉をつなげます」カードは必ず二つの言語で読む。わからない人がいるときは、両方の言葉が分かる人が手伝う。だれが手伝うか決めておく。声がよく通るように指示。参加者は発話者の言葉に耳を傾けるようにする。集中力が欠けるとうまくできない。

5 進行役は、必要と判断したら、4 を繰り返す。ただし時間は、5 の所要時間の三分の一ほどでよい。まだみんなが歩行しているときに、ストップと声をかけて動きを突然に止める。進行役は、「実は、これは二つの詩です。いまからもう一度、カードの詩句を繋げていきましょう。自分の番が来たな、と思ったら、はつきりと読んでください。ひとつの詩は右へ、もうひとつの詩の言葉は左へ、読み上げた順番に、並んでみましょう」と指示する。この部分は、ゆっくりと進める。

小さなグループの活動

1 二つのグループに分かれる。今度はもう一度、4 と 5 と同じ要領で、グループのなかで詩句を発話しながら並べていく。それぞれのグループの進行は、進行の補佐役が受け持つ。なお、この部分の目的は、原詩の再構成にはない。それを必ず、補佐役によく説明しておく。正確にもとの詩の姿にもどすことではなく、原詩に感化されて参加者が新しい言葉による表現を生み出すことが目的である。

2 進行役は、全体の流れを観察し把握する。時々、小さなグループの活動の中に入る。だいたい詩句の順序が決まったのを見て、「紙とセロテープを配ります。まず、紙の上に詩句を並べてみてください。それからみんなで、話しあって、その順序でいいか考えてください。順序を変更したい人は、かならず仲間にそれでいいか、尋ねてください。全員がこれでいいと考えたら、セロテープで固定します」と指示。補佐役は、話し合いの流れを円滑にするように助ける。みんなの意見が自由に交換できるように促す。自分の考えを押し付けない。

3 グループの活動が終わったら、進行役は「それではみんなで読む準備をしましょう。どんな読み方をしたらいいか話し合ってください。動きや音楽や音を使ってもいいですよ」と指示する。

最終部(パフォーマンス)

1 一つのグループがパフォーマンスする間、もうひとつのグループは観衆となる。

2 ふたたび輪をつくる。椅子にかける。進行役は「旅は終わりに近づきましたね。どんな詩だったのでしょうか。耳を傾けましょう」と指示。進行役は、セルビア語と日本語で二つの詩を朗読する。「どんな旅でしたか。(進行係の椅子の下からみんなの気持ちを集めたものを取り出す仕草をし、それを中央にそっと置く) どんな旅だったか、一つの言葉で表して繋げましょう」と指示。

3 部屋の片隅に置いた紙袋を取り出す。参加者の一人に、袋を開いてもらう。「今月生まれは誰ですか」など、アトランダムに代表を選ぶこと。ここで林檎が出てくる。進行役はみんなに挨拶をする。

共同の評価

ワークショップの後、なるべく早い時期に、ワークショップについて参加者および進行の補佐役と話し合う。筆記形式のアンケートも行う。個々の参加者の評価はしない。

詩をめぐるワークショップの特徴

以上がこのワークショップの構造である。2003 年、ベオグラードの芸術大学で演劇を教えるアンドリアナ・ヴィデノヴィッチ氏が発案したプレヒトの詩をめぐるワークショップのモデルを応用した。一人一人が与えられたカードの詩句を歩行しながら発話し、歩行をとめ、共同で詩句を繋げるというワークショップである。詩をめぐるワークショップは、通常の教室活動から離れたオータナティヴであり、ベオグラード文化センターを会場に市民にも公開し、一年に一回ないし二回行ってきた。通常の教室活動と異なる点がいくつかある。

1. 言語の複数性

使用言語は母語と日本語との二言語とする。参加者は、どちらの言語を使用してもよい。必要な箇所

は通訳する。通常の学習者のほかに、日本語を母語とする人たち、また日本語を学んだ経験のない一般市民にも開放する。ごく自然に、学生たちは様々な場面で二つの言語の仲介者となる。学習者は、気分や能力に応じ、その場その場で使用言語を変えることができる。

2 日常活動の異化

教室の場所を変え、新たな参加者を招くこと、音楽を流すことなど、通常とは異なる状況を作ることで、活動は活性化される。劇的な要素を盛り込み、マンネリ化した日常を生き生きとさせる。

3 異文化理解

素材とする詩を、母語と目標言語から平等に選び、翻訳をそれぞれに付すことで、日本人の参加者とセルビア語を母語とする人たちの間に、対等の関係を築き、相互関係を生む。

4 身体性の活性化

自己のための発話、他者にむけての発話、歩行などを組み合わせることで、身体性を確保する。

5 精神的な活動、美的体験の共有

詩という象徴性の高い素材は、空想、想像力を喚起する。それによってより高度な精神活動、美的な体験をさりげなく、他者と共有することが可能となる。

6 創造力の喚起

詩を再構成するという共同作業から、読み手の創造性を喚起する。詩作品を深いところで体験できる。

7 謎を解き明かす楽しみ

導入部では、袋に林檎を入れて、参加者に謎解きを求める。これは他の物でもいいが、詩のテーマやモティーフに関係があることが大切である。例えば樹についての詩では、箱にガジュマルの盆栽を隠しておいた。意外性、驚き、発見を準備することで、秘密を解き明かす楽しみを組み込む。謎解きを儀式的に行うことで、参加者により強い印象を残す。

8 直感、自発性、自然さ、自由な表現

ワークショップにおける行動や言動は、規則で統制されたものではない。詩によって喚起された思想、感情を、自由に、直感によって、自発的に自然な形で表現することが可能になる。

9 グループにおける相互関係の喚起

個人の能力を競うのではなく、各自の個性を生かした共同作業を通じて、よい人間関係を築く。

10 言語外の表現手段の導入

人間の言語活動は、多くの場合、言語外の表現手段によって支えられている。声、身振り、感触などの手段をとりこむ。触覚、嗅覚、聴覚、視覚なども活性化する。

詩をめぐるワークショップ『言葉のない世界へ』を終えて

ここに掲げた詩をめぐるワークショップ『言葉のない世界へ』は、2007年3月6日、ベオグラード文化センターを会場に行われた。参加者は38名、多くは日本学科の3年と4年生であるが、日本学の講師、助手も加わり、東京からは学生など4名が参加し、ベオグラードの一般市民4人が参加、進行補佐は日本学科の講師たちが担当。詩人ヴォイスラヴ・カラノヴィッチ氏も加わった。会場は文化センターの1階、大きなガラス張りで共和国広場が見える。床は木で暖かな色。モダンな建物である。

ここで学生たち、日本人参加者のアンケートの答えをいくつか紹介する。手書きによる学生のアンケート資料の整理はサーニヤ・ヨカ氏にお願いした。解答は無記名、自由に記入する方式で、「詩をめぐるワークショップをどのように体験しましたか」、「次回のワークショップがよりよくなるため

に、なにか提案してください』の二つの質問に対する答えである。学生はセルビア語で記入したものと筆者が翻訳、日本人参加者の解答は、ACC(『危機のなかのこども・希望』、松永知恵子代表)からのメールを転載させていただいた。

3年生の解答

- 1・ワークショップの会場となった場所は素晴らしい。
 - ・導入部の袋の中身が何かを当てるのは、興味深かった。詩の選択がよかったです。
 - ・参加者の数がちょっと多すぎた。20人くらいのほうが、内容の濃い活動ができると思う。
- 2・ワークショップは、とても心が和んだ。これからもやって欲しい。椅子の下に、みんなの言葉を隠すのは楽しかった。でも、外部から来た人が、詩をもとのようにつなげる作業で、自分のやり方をみんなに押し付けたので困った。こういう人は、もう参加して欲しくない。つぎのワークショップがもっとおもしろくなるのを期待している。大切なことは、いつもなにか新しいものを加えることだ。
- 3・昨日のワークショップは以前のものより気に入った。進行の手順も以前よりよくわかった。すべては、この二つの詩の美しさを表現するという一番の意味を十分にもっていた。
 - ・日本語とセルビア語を同時に読むのはやめたほうがいい。
- 4・詩をめぐるワークショップは、大変に興味深かった。今までのワークショップのなかで一番気に入った。日本から来た人々は、うちとけてくれて驚いた。誰もが自分の空想力、個性を発揮した。誰もが明るく、みんなといっしょに笑った。
 - ・とくに気に入ったのは、ワークショップの会場となった場所、共和国広場がよく見えた。ワークショップの音楽は快くて心が和んだ。みんなとても楽しんだ。みんなと付き合ういい時間だった。
- 5・声を出して読むのが楽しかった。声を出すことで自分たちの感情を表すことができたから。
 - ・もう少し多くの数の詩を、声にして読みたかった。そしてペアで読みたかった。
- 6・ここで選ばれた詩は気に入った。ワークショップはいつもとは違う方法の詩の研究であり、それは一人一人が、自分らしい詩の体験を表現すること、新しい詩を産み出すことも可能にするのだ。
 - ・これからも、昨日のように素敵だったらしい。
- 7・昨日ははじめてワークショップに参加したが、こんな活動の内容だとは想像もつかなかった。学生がひとりづつ詩を読み、みんなの注意はその学生だけに注がれると思っていた。だから、これまでワークショップに参加するのを避けていたのだろう。すべての学生が全員参加という組織のしかたが、とくに気に入った。詩を分析したり、また自分の詩を書くという課題があってもいいと思った。
- 8・ワークショップで一番気に入ったのは、新鮮で効果的な詩へのアプローチである。毎日の生活では時間がないから、詩のための忍耐力みたいなものもない。だから、昨日のようなワークショップは、日ごろ失われたを取り戻すよい機会である。人々と付き合いながら、また楽しみながら、このように繊細な芸術の側面について学ぶことができるがとても気に入った。そうした側面は、これまで閉じられた扉のむこうで、研究され取り扱われてただけだった。
 - ・このように楽しい方法で、詩を学ぶだけではなく、二つの文化を結びつけることができる、日本とセルビアの文化である。私は日本学を学んでいるから、その点が一番、気に入った。
- 9・現代人は仕事や日々の義務で忙しくしているから、精神生活や遊びを忘れている。このようなタイプのワークショップは、心理セラピーのような働きがあるともいえる。私は自由と子供の遊びの感覚はもちろんのこと、私たちの精神を高めるような要素が気に入った。
 - ・これは若い人たちによくある羞恥心、そのほか道徳的な壁を乗り越えるよい方法である。様々な人

が、初対面の人が、向かい合って詩を読みあうことはまずないが、それはとても素敵な感じだった。

4年生の解答

1・昨日のワークショップは、とても気に入った。大変に動的で活発だった。人々の間の相互関係に重きがおかれていたのが気に入った。日本語とセルビア語で、若い人と年の多い人と、また日本語を話す人、日本語を母語とする人が詩句を読みあうのが気に入った。空想力が強く喚起され、私たちだけにゆるされた「目に見えない世界」に出ることができたし、私たちが思いついた言葉は、私たちの「秘密」のまま残った。詩句を通して、まだ知らない人たちと友情を分かち合い理解しあうことは、大変に興味深いことであり、役に立つと思う。

・次のことを提案したい。カードに書かれた詩句が配られたが、その言葉を発話する前に、自分の思いを加えてみるのはどうだろうか。例えば、終わりの部分のない詩句を配り、その部分を私たちが自分の考えで完成するのはどうだろう。そのほかの点は、いつも以上に、ほんとうに気に入った。このような方法で日本語を学ぶのが気に入った。

2・ワークショップは、いつもよりずっと気に入った。とくに詩句から詩を再構成するという課題が気に入った。日本からきたゲストのみなさんが、非常に活動によくうちとけて私たちとよく協力してくれたのは、とてもよかったです。詩人ヴォイスラヴ・カラノヴィッチさんがいらっしゃってくれたのは、とても光栄で、このワークショップの励みになった。楽しくて創造的だった。詩の言葉を体験する最高の方法だ。

・何一つ、変えることはない。今回は、参加者の間に、とてもよい人間関係が生まれた。

3・ワークショップはとてもよく構想され実現された。いくつか当惑する場面もあったが。「触りながら」隠されたものを言い当てる場面が気に入った。「感触」を「言葉」に置き換える作業だ。また詩の選択も見事だ。このような機会が与えられ、詩の高みで私たちが瞑想するのは嬉しかった。

・ワークショップをもっと頻繁にやってほしい。また教材もこのような方法で学びたい。何人かの参加者は「不真面目」に見えるが、彼らには常に直感的、本能的な行動を喚起したらしい。

4・このような形で詩をとりあげる活動は好きだから、詩のワークショップは必ず参加しているが、今回は今まで以上によかったと思う。カードの詩句から直感で詩を創るという課題はとくによかった。

・このようなワークショップの機会が増えればよいと思う。とくに日本人の参加者がもっと沢山だったらよかったです。私たち学生の数に近いといい。そうすれば、二つの言語がよりよく響きあうだろう。それから、詩から得た印象と、私たちの最初の「秘密の言葉」によって、新しい詩を作つてみたい。

日本人の参加者の感想

諸見里裕子(社会人)

・個人的には初めてのワークショップであり、とても新鮮な印象を持ちました。ベオグラード大の学生さんと一緒に分け合った空間と時間はとても充実していました。「詩」というものをじっくりと聞いたり読んだりする機会が最近はほとんどなくなり、今回は改めてその言葉の持つ意味の深さや響きの強さを再認識することができました。「詩」というものがいかに作者の心の奥底を反映したものかも感じることができたように思います。

・手法として詩の本体を行ごとに分けて、改めてつなぎ合わせるというのはとても新鮮な発見だったと私は感じました。まったく違う印象の詩になってしまう結果にも驚かされました。たとえば同じようなアプローチかもしれません、ある詩の途中までを参加者にあらかじめ読んで理解してもらい、その後の部分を自分なりの言葉で作り上げていくというのも面白いかもしれないな、と思いました。

後半部分はあと5行くらいで、というような制約をある程度設けないといけないと思いますが、発想を豊かにめぐらせて、その詩の生まれてきた背景なども考えながら自由に言葉を作り上げるのは楽しいかもしれません。

太田繭子(学生)

・二つの言語で行ったことが、興味深かった。セルビア語はわからないのだが、セルビア語と日本語を同時に朗読してもらうことにより、普段は「ただの音」に聞こえるセルビア語がいつもと違つて聞こえた。詩の朗読を聞くときや本で読むときよりも、詩の一節一節の意味を深く考えることができた。声に出してみることにすごく意味があると思った。自分の番だと思ったときに読み上げるというのが、面白いと感じた。

・詩をみんなで一緒に朗読する(といい)。人数が少し多かったようにも感じた。

久米澤咲季(学生)

・企画側ではなく、自分自身が参加者となった初めてのワークショップだったので、全てが新鮮でした。初めに名前を言った後、「秘密」の入った袋を回していくところでは、自分がとてもワクワクしていたのを覚えています。とても素敵なスタートでした。また、自分で言葉を選んでそれを椅子の下に置き、隣の人へ渡していくところも面白かったです。私は自分の言葉を椅子の下に置いて、それが何をしているか覗いてみると今までの人生、当然と言えば当然でしょうか、考えたこともなかつたのです。ちなみに私の「勇気」という言葉は椅子の下で眠っていました。

・佳代子さんがお選びになった二つの詩は本当に美しく、その一節一節に深い意味があったと思います。私はこの時、「本当に素敵なお詩は、例えバラバラになっても輝いているのだなあ」と思ったのです。それらを何度も心の中で、そして声に出して読んだ後、お互いに言葉を交換しました。私はセルビア語が読めず、日本語でしか伝えることができませんでしたが、見詰め合って、しっかりとその一節を相手に伝えるその行為が、とても特別でした。誰一人、つまらなそうに読んだり、面倒臭そうに読んだりする人はおらず、まるで挨拶をするように相手の目を見て言葉を交わしました。皆の心が開放されて、自由な空間が出来上がっていることを感じました。最後に出来上がった詩は、オリジナルのものとは順番が違うのに、違和感がなく、また別の世界を作り上げていました。まさに「想像」と「創造」が一緒になった素晴らしいワークショップで、私は言葉にはできない多くのものを感じ取っていたと思います。あの明るく広い教室で、丸く囲まれた椅子の内側で、初めて出会った仲間たちと宝石のようにキラキラした言葉たちを読みあって、交換し合って、組み立てて、新しい詩を作り上げたこと、私はいつまでも忘れないでしょう。そして、佳代子さんの詩を読み上げる時の力強く、澄んだ声は今も鮮明に私の脳裏に焼きついています。

このような体験をさせて頂くことができて、本当に嬉しく思っております。ありがとうございました。

・今となっては、楽しかったこと、感動したことばかりが思い出されますが、一つわかりにくかったところと言えば、詩を交換しあった後、自分の一節が二つの詩のうちどちらに属するのかを考え、動くところでした。あの場面は、本当は佳代子さんにリードして頂くのではなく、自らが考えて判断するところだったのでしょうか?もう一つは、難しい問題かと思いますが、終盤少し焦ってしまったので、時間がもう少し長ければよかったな、と思いました。

終わりに

この日の活動は和やかな感情につつまれていた。「秘密の言葉」を椅子の下に隠すのは、進行役を

つとめた私の即興の部分である。この部分がかなり重要な働きをしていたのは発見であった。

アンケートからは、多くの仮定を引き出すことができるし、私たちがワークショップで目指していたものの確認、裏づけもできる。ここで強調したいのは、従来の古典的な教室活動とはちがって、到達すべき目標を決めているわけではない。活動の流れの大きなフレームを提供するが、ここで展開される活動は、多様であり多層的である。その場その場に応じた、二つの言語による音読、聴解、小さな通訳の活動、自由会話、異文化の体験、詩の観賞など、人と人の出会いのなかで活動は自然に繰り広げられる。詩をめぐるワークショップは、自然な形で築かれた人間関係のなかで、芸術体験、異文化体験など精神的な体験を通して、学習者を動機付け、言語能力の発達を可能にする。

紙面の関係で、アンケート結果の分析は別の機会に行うが、ふたつのグループが再構成した詩をここに掲げる。それぞれの詩のもの姿は、最後に提示した。アンダーラインを施した部分は、田村隆一の詩から取りこまれた部分で、カラノヴィッチの詩の最終部に、田村隆一の詩から三行が付け加えられた形となった。この参加者たちの「作品」についての分析も、別の機会に譲りたい。

A グループ

詩を書くということ

詩をつくろう 羽毛のような
空気の見えない肌に
産毛が 光にさわって震える
甘く みずみずしい言葉をつなげよう
果物のつややかな皮膚をすべり
鉛筆はいらない するどいナイフも
しっかりつかむ指も
もぎたての果物を
紙の白い皮も
さしのべる手もいらない
意味のむこうの梢に
これから詩の言葉は
林檎の皮に書こう
手のひらの この詩のような
紅や金の詩の言葉を
さきの尖ったひと筋の光で
きみの沈黙(ちんもく)の舌(した)からおちてくる痛苦(つうく)
あなたの涙(なみだ)に 果実(かじつ)の核(かく)ほどの意味があるか
ぼくはただそれを眺(なが)めて立(ち)ち去(さ)るだろう

B グループ

帰途

あなたのやさしい眼(め)のなかにある涙(なみだ)
ぼくはあなたの涙(なみだ)のなかに立ちどまる
ぼくはきみの血(ち)のなかにたったひとりで帰(かえ)ってくる
きみの一滴(いってき)の血(ち)に この世界(せかい)の夕暮(ゆうぐ)れの
ふるえるような夕焼(ゆうやけ)けのひびきがあるか
あなたが美しい言葉に復讐(ふくしゅう)されても
そいつは ぼくとは無関係(むかんけい)だ
きみが静(しず)かな意味に血(ち)を流(なが)したところで
そいつも無関係(むかんけい)だ
ぼくたちの世界(せかい)にもし言葉(ことば)がなかつたら
意味(いみ)が意味にならない世界(せかい)に生きていたら
どんなによかったか
言葉なんかおぼえるんじやなかつた
日本語とほんのすこしの外国語(がいこくご)をおぼえたおかげで

詩のもとの姿

帰途

田村隆一

言葉(ことば)なんかおぼえるんじやなかつた
言葉(ことば)のない世界(せかい)
意味(いみ)が意味にならない世界(せかい)に生きていたら
どんなによかったか

あなたが美しい言葉に復讐(ふくしゅう)されても
そいつは ぼくとは無関係(むかんけい)だ
きみが静(しず)かな意味に血(ち)を流(なが)したところで
そいつも無関係(むかんけい)だ

あなたのやさしい眼(め)のなかにある涙(なみだ)
きみの沈黙(ちんもく)の舌(した)からおちてくる痛苦(つうく)
ぼくたちの世界(せかい)にもし言葉(ことば)がなかつたら
ぼくはただそれを眺(なが)めて立(ち)ち去(さ)るだろう

あなたの涙(なみだ)に 果実(かじつ)の核(かく)ほどの意味があるか
きみの一滴(いってき)の血(ち)に この世界(せかい)の夕暮(ゆうぐ)れの
ふるえるような夕焼(ゆうやけ)けのひびきがあるか

言葉なんかおぼえるんじやなかった

日本語とほんのすこしの外国語(がいこくご)をおぼえたおかげで

ぼくはあなたの涙(なみだ)のなかに立ちどまる

ぼくはきみの血(ち)のなかにたったひとりで帰(かえ)ってくる

(詩集『言葉のない世界』、1962年より)

詩を書くということ

ヴォイスラヴ・カラノヴィッチ (Vojislav Karanovic)

これから詩の言葉は

林檎の皮に書こう

紅や金の詩の言葉を

さきの尖ったひと筋の光で

果物のつややかな皮膚をすべり

甘く みずみずしい言葉をつなげよう

鉛筆はいらない するどいナイフも

紙の白い皮も

意味のむこうの梢に

さしのべる手もいらない

もぎたての果物を

しつかりつかむ指も

空気の見えない肌に

詩をつくろう 羽毛のような

産毛が 光にさわって震える

詩の言葉で

美しい林檎を書こう

手のひらの この詩のよう

(原題 O pisanju poeziye, 詩集 *Svetlost u naletu*, Beograd, 2003. より)

「詩をめぐるワークショップ」には、ベオグラード大学文学部教官 Danijela Vasic, Dalibor Klickovic, Divna Tomic, Sanja Joka, 渕上まゆみ各氏が参加し、小さなグループの進行を担当した。ゲストとして ACC(東京)のみなさん、詩人 Vojislav Karanovic 氏をお招きした。この企画には、KCB(ベオグラード文化センター)の協力があった。ここに感謝したい。

なお 2008 年 8 月 22 日の日本語教育連絡会議の「詩をめぐるワークショップ」には、渕上真由美、和田沙江香、Danijela Vasic, Dalibor Klickovic, Divna Tomic, Jelena Nikolic 各氏が参加した。